

## 「一遍上人絵伝」に描かれた教信寺

\*「一遍上人絵伝（いっぺんしょうにんえでん）」は「一遍聖絵（いっぺんひじりえ）」とも呼ばれます。ここでは、「一遍上人絵伝」に統一しておきます。

延応元年（1239年）、一遍は伊予国（現：愛媛県）の豪族の子として生まれました。

修行を重ね各地を行脚するうち、弘安2年（1279年）信濃国で「踊り念仏」を始めました。「踊り念仏」は空也に倣ったものといわれています。

一遍は、沙弥教信にも傾倒していました。

弘安5年（1282年）には、布教のため鎌倉入りを図りますが、拒絶されました。

弘安7年（1284年）上洛し、都の各地で踊り念仏を行なっています。

その後、弘安9年（1286年）、四天王寺を訪れ、当麻寺（たいまでら）・石清水八幡宮を参詣します。

\*ウィキペディア参照

## 一遍、教信寺を参詣



(一遍上人絵伝：第九卷第三段・いなみの教信寺に一夜を明かす)

さて、四天王寺・当麻寺・石清水八幡宮で念仏を行ったのち、一遍の一行は、播磨へと向います。目指すは、野口の教信寺でした。

その時の様子が「一遍上人絵伝」(上絵)に描かれています。

この庵こそ、「絵詞」で「いなみの島の臨終すべきよし思つれど」と述べているように、一遍が自らの臨終の地としてみずからの終焉の地として撰んだ場所でした。

絵伝の右隅に石棺のようなものがあります。おそらく「教信が死に臨んで、自らの体を獣に施した場所か、それとも教信を茶毘にふした場所」を描いたものでしょう。

一遍は、この時、めっきり体力の衰えを感じていました。この石棺は、一遍の運命を暗示しているように思えてなりません

野口は、教信が「荷送り上人」とも呼ばれ、民衆とともに喜び・苦しみ、そして修行した地です。彼は、ここにしばらく止まって死を迎えるつもりだったのでしょうか。それとも、再びここへ戻ってくるつもりの下見をしたのでしょうか。

いずれにしても、この後、彼の中国から四国へかけての遊行は、ひたすら、この地へ戻らんがための巡礼とさえ思える旅でした。

野口で年を越した一遍は、弘安10年(1287)の春、姫路の書写山に旅立ちます。

飯沼 博一